

原発事故被害者 相双の会

【連絡先】

国分富夫(会長)
住 所
〒 976-0052
福島県相馬市黒木字迎畑 91-12
電 話 090-2364-3613
メール kokubunpisu@gmail.com

【事務局】

鈴木宏孝 090-2909-6133 (浪江)
関根憲一 090-4889-3726 (富岡)
板倉好幸 090-9534-5657 (南相馬)

横浜の中学生の生きる勇気—差別と偏見をなくしていこう 分断され追い詰められる避難者

横浜の自主避難した中学生が「賠償金もらっているだろうから金を出せ」とか「ただでいい家にすんでいる」とかいじめにあい、それを学校も教育委員会もちゃんと対応できなかったことが、大きく問題となった。大人たちの不用意な原発避難者への偏見や差別の会話が、中学生の耳に入ったとしか思えない。

「福島でたくさん死んだから自分は生きようと思う」と勇気を振って生きていく少年に心から声援をおくりたい。同時にもっともっとひどい偏見や無理解がわたしたち原発事故被害者を取りかこんでいること、被害者がどんな苦しみを強いられているかを、多くの方に知らせていかなければならない。賠償もほとんどされず避難住宅保証も来年3月で打ち切られるという「自主避難」への国と自治体の対応も人間のやることとは思えない。勝手に避難地域を指定して線引きしておいて、この線から外は責任をおいませんといい、加害者(東電と国)のやり方からして、許せるものではない。

まるでいつまでも避難しているのが悪いかのような、6年も避難して限界だから定住しようと賠償金を使って家をたてるのが「贅沢」であるかのような風潮を放置していたら、被害者はさらに精神的に追い詰められてしまう。生きる勇気すら失い、うつ病になり、自ら命を絶つひとはふえるばかりだ。

国家的犯罪が人間の尊厳も冒す

原発避難者の子どもたちは転校から転校となり大人の私たちから見ても可哀そうではなかった。靴の中に画鋲が入っていた、「放射能くさい」「そばにくるな」等々数え切れない。「避難するようになってから成績がガタ落ち」、「不登校になった」、高校に入学したがいじめに遭い退学してしまった例もある。親も「学校へ行くなら死んだ方がましだ」と言われると退学を認めざるを得ない。いじめをしているグループ(加害者)はのうのうと学校行っている。また次のいじめをしているのかもしれない。

引っ越した先では親も出身地をいわない

ようにしているという。何故か、何を言われるか分からない。子どもが心配だからだと言う。

ふる里を追われ安住の地を求め、やっとの思いで新築したが、嫌がらせを言われて家を売りに出したという。新築した家に「倍償御殿」と落書きされた人もたくさんいる。こんなことがまかり通っているとしたら人間の尊厳に関わるだろう。

これまで培ってきた財産を全て奪われ、東電が一方的におしつける賠償金ではとても補われない。親類、友人、地域コミュニティを壊され、被害者同士が分断され、対立させられる構図が、ますます複雑化して

いる。これは「原発の犯罪」であり国家的犯罪だ。避難者への誤解にぶつかったら、黙って下を向くのではなく、粘り強く説得し

ていきたい。横浜の中学生だって懸命にがんばっているのだから。

原発つくるのも無責任、処分も無責任

中間貯蔵施設用地取得まだ一割

福島県内の除染で出た汚染土壌を保管する貯蔵施設本体工事が（11月15日）ようやく着工されたが、施設の全体面積約16平方^キの内10月末までに国と契約を結んだのは（用地取得）まだ一割にも満たない約1.7平方^キにとどまっている。

貯蔵施設の容量は最大で2200万立方^キ（東京ドーム18個分）と推計される契約は施設全体の容量の0.5%に過ぎない。

2045年までに県外へ最終処分?!

施設の使用開始から30年以内に県外へ最終処分することは法律で明記された。昨年（2015年）3月に予定地内に設けた保管場に土壌の搬入が始まったから2045年3月12日まで県外へ最終処分しなければならぬことになる。

しかし、中間貯蔵施設予定地で、登記簿上の地権者約2400人のうち半数の約1200人分の土地が実際は「所有者不明」の状態だという。代々の相続により実際の

地権者数は数十倍に増え、用地の買収や賃借の交渉はさらに難航しているようだ。

関係者によると、最も古い登記簿上の地権者の中には江戸時代後期の安政年間生まれの人もいたほか、明治時代以降、登記が更新されていない土地も多いようです。

名義変更せずに代々住み続けた場合、法定相続人が100倍以上に増えるケースもある。用地取得には全員と交渉する必要があり、膨大な時間と費用がかかる恐れがある。

無責任な原発促進が地域を滅ぼし、国民を窮地に陥れる

こんな状況で中間貯蔵施設完成があやぶまれる。そうすると各市町村にある仮置き場に影響を及ぼす。つまり、最終処分場がないままに仮置き場、中間貯蔵施設の解決はできないのである。しかし、最終処分場など受け入れる都道府県などあるでしょうか。

11・22震度5弱でまたヒヤリ

11月22日5時59分福島県沖地震 M7.4 震度5弱、津波警報発令が出た。51万人に避難指示、原発は大丈夫だろうか、避難の準備をしなければと頭をよぎる。車にガソリンは、家族はとなる。

停止中だって原発は危険

特に事故を起こした福島第一原発はいつ何が起きるか分からない不安定な状況が3.11以降続いている。第二原発3号機の使用済み核燃料プールの冷却が自動停止し

た。プールには核燃料2544体が保管され常時冷却し続けなければならない。停止時の水温29.3度制限値の温度は65度となっている。冷却水が絶たれてしまうと水は沸騰したりして燃料棒が空気中に露出し、空気の自然冷却では過熱が続きケースが高熱化、酸化し核残留物が気化拡散したりして大事故になる。原発が稼働していようがいまいが危険、ましてや事故を起こした福島第一原発はあちこち壊れたままだから、も

つとも危険と言わざるを得ない。

汚染水もヒヤリ

汚染水貯蔵タンクも、地震で漏れる危険があり一時送水を停止した。

第二原発の2～4号機で、地震後漏れいによる水たまり12カ所を確認されていながら二日遅れの24日に公表した。東電は

第二原発は通報案件ではないとしている。重大な事故を起こしながら公表基準でないからとは、いかに被害者を馬鹿にしているかです。

何時また地震が起きるかわからない。福島県民は避難の準備は常にしておかなければなりません。

第4回東京南部福島交流・視察ツアー感想

10月29日～30日、大型バス1台で東京南部から第4回目のツアーがやってきました。感想を一部紹介します。

2013年に来たとき、小高地区は田んぼの中に貝殻がいっぱいいた車がころがっていましたが、今はフレコンバックが積み上げられていました。以前の風景も、今の風景も悲しさと悔しさと胸が痛みます。自然の恵み豊かな飯舘村を、人も住めず山菜もキノコも食べられない山里にしたのは、原発を安全だと思わせた政府と東電とそれに言いくるめられた私たちだと思います。政府と東電とにこれ以上原発をつくらせない運動を少しづつやるしか道はないと、つくづく思います。 M. C

今回線量計をもって参加し、あちこちで計測してみました。同じ場所でも、植え込みの所と道路上で、また手に持った空中では全く放射能がちがったりする。安全だとして発表される数字もあてにならないものだなと感じました。各地で一方的な避難解除が行われ、東京では「もうけっこう元通りに戻っている」と思っている人が多く「風評被害」という言葉もたくさん聞きます。時がたつにつれて本当に起きていることから人々の心がどんどんはなれていっているような気がします。 T. H

レントゲン室と同じほどの放射線量が検出される場所には、レントゲン室と同じ印をつけてもいいのではないのでしょうか。こんなところに子どもを住まわせられない

と、わかりやすく訴えないと国や東電の思いつぽになりそうで、怖いと思いました。日中しか帰れない家の周りを手入れされる方々の気持ちを慰めるように、人気の殆どない町で柿の実がなっていたり、菊やバラが花を咲かせていたのが印象的でした。

T. A

昨年来たとき、小高地区の家の前に黒いフレコンバックが積まれていたのを覚えています。ニュースで小高が避難解除になったと聞き、驚きました。まだ1年もたっていないのに大丈夫なのかなと思っていました。今回3%くらいしか帰宅していないと伺い、やっぱりと思いました。被災者を思いやらない政治には腹が立ちます。 T. T

福島原発のことは今の日本では殆んど日常の話題にはのぼってこない。「帰還」「帰還」と地元自治体や地元有力者を、またお金をちらつかせるきたない力によって抑えこんで、何とか「以前の形」に戻ったととりつくろうやり方が、今やまかりとおっていると伺ってますますこれではいけないと思いました。「帰還の押しつけによって原発事故はなかったことにするつもりだ」という説明を改めて伺って、東京でこそこの欺瞞を大きく訴えなければいけないと感じております。 I. A

来春の避難解除に向け、除染が進んでいるせいか、フレコンパックの山は昨年より増えたように見えた。国道6号線を走るバスの中、刻々と放射線量は増え続け最大5.17まで上がった。セイタカアワダチ草が綺麗すぎる隣にフレコンパックの山。そして帰還する人々の家のすぐ近くにもあるフレコンの山。20ミリシーベルト以下だから帰れとは無責任だ。’20年のオリンピックに福島は安全に復興できると言いたいのがためであれば、とても許せないことだ。自分に出来ることで福島を原発を話し続けたいと思う。

H. Y

一見きれいになった町、村と仮置き場に片づけられたフレコンパック、除染では元に戻らない放射線量と、1ミリシーベルトを20ミリシーベルトに合わせた基準での帰還区域設定、中は動物の荒らし放題で住めなくなって壊されていく家々（バスから猿が歩いているのが見えた）と、帰還解除されても明かりのつかない町並みと、草茫々の中に埋まりそうな廃墟の村の姿などが印象に残りました。事故前の福島の自然と生活を返せと、伝え、訴えていきたいと思いました。

M. U



東京南部バスツアー参加者

原発避難者訴訟第20回口頭弁論

12月21日（水）10時～17時 福島地裁いわき支部
二つの法廷で、10人が原告本人尋問します。